広島大学心理学研究　第3号　2003

主婦の生涯学習に対するイメージとその実施に及ぼす心理的要因

馬越 英美子・松田　文子

Images of lifelong learning and psychological facts in its realization in homemakers

Emiko Magoshi and Fumiko Matsuda

主婦の生涯学習実施を推進する要因を探るため，質問紙調査を実施した．調査Ｉでは，主婦が種々の生涯学習活動に参加する場合，どのようなことを重視するかについて調査を行い、生涯学習活動の特色を表す要因を特定した．調査Ⅱでは，大学（院），市民講座，カルチャースクール，サークルの４種類の生涯学習活動に参加することについて，それぞれ主婦がどのようなイメージを持っているかを調べた．調査Ⅲでは，４種類の生涯学習活動実施状況により群分けをし，それぞれの群の家庭内の心理的要因の特徴や自己効力感について調べ，生涯学習実施に影響を及ぼす心理的要因を明らかにした．自分のやりたいことをするためには，主婦の場合は，家族，特に夫の協力が必要であり，子どもの育成にも配慮していることがうかがえた．これは主婦の生涯学習の基盤が円満な家庭と自信にあることを示していると言えよう．調査は生涯学習が意図的学習であるということも示しており，主婦の生涯学習実施を推進する要因は，家族のことを理解することに勤め，円満な家庭の形成に力を注ぎながら、自分に適した手段や方法を選ぶことであることが分かった．

キーワード：生涯学習，主婦，自己効力感，

問題

人は一回限りの人生を充実したものにしたいと願っている．そのために，多くの人は様々な機会をとらえて学び，修養を積んでいる．学習の機会が一部の人にしか与えられなかった時代もあったが，現代の日本は多くの人にとっては望めば様々なことを学習することが可能な社会になっている．特に，1981年の中央教育審議会答申「生涯教育について」以来，法や政策の上では生涯学習を行う環境が着々と整備されてきているが，生涯学習を実施する学習者の側の意識や現実の実施状況はどうであろうか．1999年12月に総理府が行った世論調査によれば，「これからの社会は，学校で学んだ後も，生涯にわたって新しい知識や技能を学ぶことがますます大切になると思うか」という質問に対し，「そう思う」「ある程度そう思う」と答えた者を合わせた割合が92%と大変高い．そして，その認識は女性のほうが高く，生涯学習に対する要求も女性では64%に達している．このように多

くの人，とりわけ女性は，与えられた諸能力を生涯にわたって発展させ，“生きがい”のある人生を送りたいと願っている．また，実際に生涯学習を実施した者の53%が自分の人生がより豊かになっていることを実感している．しかし生涯学習の実施となると，趣味的なもの，健康のための活動，スポーツ等を入れても44%にすぎず，生涯学習の必要性の認識や生涯学習に対する要求との落差は大きい．多くの人が生涯学習の必要性を認識し，実施したいと思いながら実施しない（あるいは出来ない），その原因は何であろうか．

第一に考えられることは，制度の不備あるいは実施の機会の少なさである．しかしながら，今日各種カルチャースクールは多種多様に用意されており，公的機関の実施する市民講座や公開講座等も，むしろ人の集まらないことのほうが心配されている．大学（院）でさえ，社会人，高齢者の受け入れ体制は奨学金の制度を始め，ここ数年急速に整ってきている．従って制度の不備や実施の機会の少なさが主要な原因とは思えない．

次に考えられることは経済的な負担の問題である．しかし高等学校進学率は100%に近く，その後の高等教育進学率も50%に近いことを考えると，経済的なことが主要な原因とも思えない．

従って，生涯学習の必要性の認識や生涯学習に対する要求の高さに比較して，その実施率が低いのは，機会が十分に知られていないこと，及び，より個人的で心理的な要因が主要な原因となっているのではないかと推測される．

そこで本研究では，生涯学習の実施に関連すると思われる家庭内の要因や個人の要因について検討する．特に本研究は主婦に焦点を当てた．現代では，ある程度子育ての目鼻がたつと自分自身の人生を考えることが出来るようになり，社会もそれを当然のことと受け入れるように変化してきている．先の世論調査結果でも，男性より女性のほうが生涯学習要求が高く（例えば，「生涯学習をしてみたい」と答えた人の割合が，女性68%，男性59%），かつ40歳台，50歳台において生涯学習要求が高い(例えば,「生涯にわたり新しい知識等を学ぶことが大切だと思う」と答えた人の割合は，40歳台で70%，50歳台で69%)．

Bolger et al.(1990) によれば，働く母親は社会に接触することでソーシャルサポートにアクセスしやすく，社会的・情緒的資源を利用しやすい．またそれによって働く母親はパーソナルコントロール感を得ることができるので，家庭のストレスに効果的に対処できるという．この見かたを援用すると，生涯学習という手段で社会に接触することは主婦を孤立している状態から解放し，支えあえる仲間作りを可能にし，よりストレスの少ない自己効力感のある生活を主婦にもたらすのではないかと考えられる．そして，そのことは主婦が主婦としての立場を離れ，一人の人間としてのありのままの自分を受け入れる機会ともなるだろう．さらに，熟年の妻の夫婦関係満足度は夫よりも低いことや(柏木・数井・大野，1996)，中年女性の最も問題とされる身体的変調である更年期障害は，身体的因子のみならず，社会的因子，心理的因子の3つの因子が複雑に絡みあって症状が形成される(赤松，2001) などの先行研究から考えると，主婦が社会と接触する手段となる生涯学習への参加に焦点を当てて，その個人的心理的要因を探ることは意義深いことであろう．

本研究では，老後の生活の充実が叫ばれている今，子育て後の老後が急速に伸びている主婦に焦点を当て，何が生涯学習の実施を躊躇させているのかを検討する．特に心理的要因に着目するが，

対象が主婦であるため，生涯学習の実施に関連する心理的要因の中でもとりわけ家庭内の心理的要因を明らかにすることを目的とする．

まず調査Ⅰで，主婦が生涯学習活動の実施においてどのようなことを重視するか質問紙調査を行った．その結果を因子分析することにより，生涯学習活動の実施において考慮される要因を抽出した．調査Ⅱでは，代表的な生涯学習活動として，大学・大学院，市民講座，カルチャースクール，サークルの4種類をとりあげ，主婦がそれらに対して抱くイメージを，調査Ⅰの要因を用いて明らかにした．調査Ⅲでは，それら4種類の生涯学習活動のうち，どの活動を実施しているか，あるいは何も実施していないかによって主婦をグループ分けし，グループごとに家庭内の心理的要因と自己認識に関する要因に特徴がみられるか否かを検討し，調査Ⅱで明らかにした4種類の生涯学習活動のイメージの違いを考慮して結果を解釈した．

調査Ⅰ

方法

被調査者　被調査者は，川崎市にある幼稚園から大学院までを持つ私立一貫校の付属高等学校1，2年生の母親456名であった．

質問紙　市川（1998）を参考に，生涯学習活動への参加を決める際にどのようなことを重視するかを調べる質問項目20個作成し，「大学・大学院に入学して勉学する，公的機関が実施する市民講座に参加する，私的企業が実施するカルチャースクール（おけいこごと，通信教育等を含む）に参加する，友人等によるサークル活動に参加するなどの生涯学習活動に参加するかどうかを決める場面を想定してください．あなたは次のことがらをどの程度考慮しますか」という教示の下で，「非常に考慮する」～「全く考慮しない」の5段階（5～1）で評定してもらった．20項目は表1に示してあるもので，質問紙ではこれがランダムに並べ替えてある．

手続き　質問紙は担任より生徒を通じて配布，回収した．

表1　調査1の20項目の平均評定値（*SD*）と因子分析結果（主因子法、バリマックス回転）

因子名	項目	平均評定値	*SD*	因子 1	2	3	4	5
みばえの良さ	周りの人に認めてもらえるかどうか	2.15	(0.87)	.79	.15	.09	.18	.06
	他の人より優れているような気持ちになれるかどうか	1.91	(0.79)	.77	-.03	.08	.09	.11
	世間体が良いかどうか	2.05	(0.88)	.64	.10	.18	.15	-.05
	時代の流れに乗れるようになるかどうか	2.40	(0.90)	.49	.31	.09	.27	-.01
参加しやすさ	堅苦しくて加わりにくいことはないかどうか	2.96	(1.01)	.25	.64	.02	-.07	.19
	気軽に参加できるかどうか	3.37	(0.88)	.11	.56	.07	-.03	.24
	今から始めるのは遅い、ということはないかどうか	2.74	(0.99)	.38	.50	.02	.08	.14
充実感	生活にうるおいが出るかどうか	3.33	(1.02)	.24	.06	.76	.16	.18
	老後の趣味になるかどうか	2.94	(1.04)	.21	.17	.62	.05	.05
	充実感を得ることができるかどうか	3.90	(0.93)	-.02	.06	.48	.26	.29
有益性	学んだ知識や技術が、仕事や生活の役に立つかどうか	3.31	(0.97)	.26	.02	.09	.66	.06
	身に付けるのに時間がかかる知識や技能を学ぶことができるかどうか	3.09	(0.91)	.17	.22	.03	.61	.01
	色々な面から物事が考えられるようになるかどうか	3.10	(0.93)	.24	-.03	.24	.44	.14
楽しみ	楽しいかどうか	4.01	(0.92)	-.03	.27	.13	.02	.73
	刺激が得られるかどうか	3.34	(1.01)	.17	.12	.17	.21	.54
	能力が必要であるかどうか	3.35	(0.85)	.01	.38	.12	.22	-.02
	お金がかかるかどうか	3.70	(0.88)	-.06	.38	.10	.17	.04
	家族の協力が必要であるかどうか	3.25	(0.97)	.03	.31	.34	.22	-.16
	新しいことを知ったりできるようになるかどうか	3.99	(0.81)	-.04	.07	.29	.39	.13
	友達ができるかどうか	2.77	(0.92)	.30	.29	.25	-.06	.09
			固有値	2.46	1.75	1.64	1.57	1.15
			累積寄与率(%)	12.3	21.1	29.3	37.1	42.9

注　因子負荷量がすべて.40以下である項目は、いずれの因子にも含めなかった．

結果と考察

回収した456人分の調査紙のうち，1項目でも記入漏れのあったものを除き，残りの422人分を分析に使用した．5段階の評定値5〜1を便宜的に間隔尺度とみなし，主因子法，バリマックス回転により因子分析を行った．その結果表1のような5因子を抽出し，「みばえの良さ」「参加しやすさ」「充実感」「有益性」「楽しみ」と各因子を命名した．20項目のうち，最大因子負荷量が0.4以下であった5項目はどの因子にも含めなかった．しかし，そのうち「友達ができるかどうか」を除く4項目は，平均評定値が高く，参加への考慮度がかなり高かった．そこで，この4項目は特殊因子「能力」「お金」「家族の協力」「新知識・技能」と命名して残しておくこととした．これにより生涯学習を実施するにあたっての要因が明らかになった．

調査II

方法

被調査者　被調査者は，調査Iと同じ私立高等学校の3年生の母親240名で，調査Iとは異なる人達である．

質問紙　調査Iと同じ内容の20項目（ただし語尾の「かどうか」等を除く）を用い，「大学・大学院（科目履修生を含む）に入学して勉学することについて」，「公的機関が実施する市民講座へ参加することについて」，「私的企業が実施するカルチャースクール（おけいこごと，通信教育等を含む）への参加について」，「友人等によるサークル活動への参加について」に対し，それぞれどのようなイメージを持っているかを，「非常にそう思う」〜「全くそう思わない」の5段階（5〜1）で評定してもらった．手続きは調査Iと同様であった．

結果と考察

回収した173人分の調査紙のうち，1項目でも記入漏れのあったものを除き，残りの167人分を分析に使用した．

各生涯学習活動について，調査Iで得られた5つの共通因子および4つの特殊因子ごとに，調査IIの平均得点を求め図示したのが図1である．生涯学習活動の種類によって得点が異なるかどうかを調べるため各因子ごとにF検定を行った．（なお以下検定はすべて5%有意水準である）9因子の全てで有意であったので（「みばえの良さ」から「新知識・技能」まで順に，$F(3,\ 498)=40.20, 2.70, 10.90, 77.00, 16.33, 154.60, 223.87, 140.25, 55.94$,）ライアン法による下位検定を行った．その結果をまとめると，次のようになる．大学（院）のイメージは，みばえが少なくとも他よりは良く，有益性があり，新しい知識・技能を獲得することが出来，実施にあたっては本人の能力と家族の協力とお金を必要とするというものであった．市民講座のイメージは，楽しさは他の活動よりやや劣るが，実施にはお金がかからないというものであった．カルチャースクールに対しては充実感と楽しみを得ることが出来るが，実施にあたってはお金がかかるというイメージがもたれていた．サークルのイメージは有益性が低く，新しい知識・技能の獲得はあまり期待できないが，お金をかけずに楽しむことが出来るというものであった．

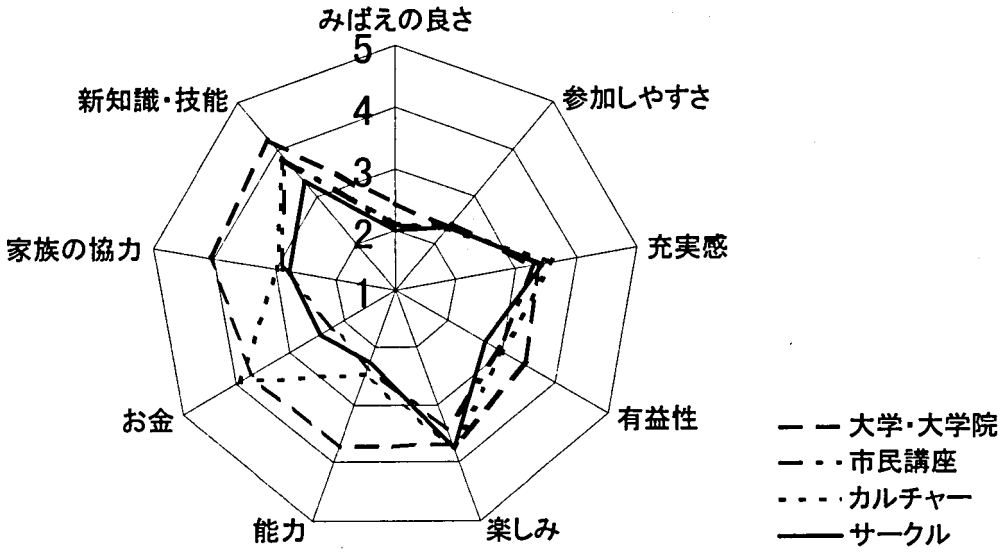

図1　生涯学習活動別のイメージ

調査Ⅲ

調査Ⅰ，Ⅱの結果，4種類の生涯学習活動に対して主婦が抱いているイメージが異なることが明らかになった．したがって，実施にかかわる心理的要因も異なることが予測される．そこで，4種類の生涯学習実施状況により，被調査者を分類し，家庭生活や家族関係，自分の家庭内での位置などについての認識度，満足度，重要度の程度などが異なるか，また，自己効力感の高さが異なるかどうかを検討した．

方法

被調査者　被調査者は，調査Ⅰ，Ⅱと同じ私立高等学校の1，2年生の母親545名（年齢範囲37歳～57歳，平均年齢45歳）であった．調査Ⅰの被調査者と一部重なっているが，2つの調査間には6ヶ月の間隔があるので相互の影響は無視出来よう．

質問紙　年齢，家族構成，学歴，職業（パートを含む）の有無に引き続いて，どのような生涯学習活動を実施しているかを次の5項目，①大学や大学院に在学（科目等履修生を含む），②公的機関が実施する市民講座への参加，③私的企業が実施するカルチャースクールへの参加（おけいこごと，通信教育等を含む），④友人等によるサークル活動への参加，⑤その他（TV，ラジオによる講座，個人で行っているライフワーク等）に対して「はい」「いいえ」で回答してもらうことによって調べた．続いて，上記4種の生涯学習活動の認識度，要求度，重要度に関する質問項目（表2参照），家

庭生活や家族関係についての認識度，満足度，重要度に関する質問項目，自分の家庭内での位置等についての認識度，満足度，重要度に関する質問項目（表３参照）を作成し，「非常に～である」から「全く～でない」の５段階（5～1）で評定してもらった．

表2　生涯学習実施状況にもとづく群別にみた各生涯学習の認識度、要求度、必要度の平均評定値(*SD*)及び群間の差に関する検定結果

	群1 *n*=124 カル・市民カル	群2 *n*=64 サークル	群3 *n*=39 市民・市民サー	群4 *n*=67 カルサークル・3つ	群5 *n*=192 なし	*F*(4, 481)	多重比較
知っている							
大学(院)	2.66 (0.77)	2.70 (0.66)	2.77 (0.58)	2.76 (0.72)	2.67 (0.75)	0.38	
市民講座	2.86 (0.70)	3.00 (0.76)	3.62 (0.67)	2.99 (0.56)	2.85 (0.77)	9.84 *	3>2,4,1,5
カルチャースクール	3.31 (0.75)	2.97 (0.89)	3.13 (0.86)	3.33 (0.56)	2.68 (0.82)	15.99 *	4,1>3,2>5
サークル	2.42 (0.85)	3.06 (0.77)	2.64 (0.90)	3.18 (0.72)	2.39 (0.86)	17.57 *	4,2>3,1,5
したい							
大学(院)	2.65 (1.00)	2.47 (0.78)	2.59 (0.94)	2.66 (0.90)	2.33 (0.98)	2.94 *	
市民講座	3.02 (0.95)	2.95 (0.88)	3.72 (0.72)	3.24 (0.78)	2.69 (0.90)	13.65 *	3>4,1,2>5
カルチャースクール	3.39 (0.87)	2.97 (0.84)	2.69 (0.80)	3.42 (0.84)	2.65 (0.92)	18.97 *	4,1>2,3>5
サークル	2.42 (0.78)	3.25 (0.71)	2.87 (0.95)	3.48 (0.82)	2.40 (0.87)	32.15 *	4>2,3>1>5
必要							
大学(院)	2.29 (0.93)	2.08 (0.78)	2.36 (0.93)	2.45 (0.94)	2.14 (0.95)	2.14	
市民講座	2.67 (0.93)	2.50 (0.80)	3.28 (0.86)	2.91 (0.95)	2.41 (0.89)	10.03 *	
カルチャースクール	2.99 (0.95)	2.47 (0.69)	2.46 (0.76)	3.25 (1.01)	2.31 (0.83)	21.56 *	4,1>2,3,5
サークル	2.24 (0.82)	2.78 (0.92)	2.69 (0.83)	3.15 (1.03)	2.12 (0.75)	24.17 *	4>2,3>1,5

注　評定値は「非常に～」が5、「全く～でない」が1.
群1「カル・市民カル」: カルチャースクールのみの参加者と市民講座とカルチャースクール両方の参加者.
群2「サークル」: サークルのみの参加者.
群3「市民・市民サー」: 市民講座のみの参加者と市民講座とサークル両方の参加者.
群4「カルサークル・3つ」: カルチャースクールとサークル活動両方の参加者と市民講座、カルチャースクール、サークル活動3つともの参加者.
群5「なし」: 何にも参加していない人.
＊ $p<.05$.

表3　生涯学習実施状況にもとづく群別にみた家族についての認識度、満足度、重要度の平均値(*SD*)及び群間の差に関する検定結果

	群1 *n*=124 カル・市民カル	群2 *n*=64 サークル	群3 *n*=39 市民・市民サー	群4 *n*=67 カルサークル・3つ	群5 *n*=192 なし	*F*(4, 481)	多重比較
知っている							
夫性格	4.18 (0.54)	4.16 (0.54)	4.10 (0.60)	4.28 (0.55)	4.09 (0.66)	1.34	
夫仕事	3.51 (0.79)	3.58 (0.79)	3.23 (0.67)	3.58 (0.80)	3.47 (0.93)	1.34	
子供性格	4.25 (0.61)	4.08 (0.54)	4.13 (0.57)	4.22 (0.62)	4.05 (0.60)	2.60 *	1>5
子供能力	3.92 (0.68)	3.72 (0.72)	3.82 (0.64)	3.85 (0.72)	3.72 (0.66)	1.88	
家庭内人間関係	4.30 (0.61)	4.28 (0.63)	4.28 (0.60)	4.43 (0.56)	4.14 (0.71)	2.93 *	4>5
満足							
夫性格	3.26 (0.99)	3.31 (0.87)	3.21 (0.92)	3.63 (0.88)	3.14 (0.96)	3.45 *	4>5
夫仕事	3.59 (0.83)	3.66 (0.80)	3.51 (0.76)	3.87 (0.89)	3.44 (0.90)	3.38 *	4>5
子供性格	3.58 (0.70)	3.39 (0.70)	3.56 (0.75)	3.64 (0.90)	3.46 (0.74)	1.41	
子供能力	3.45 (0.74)	3.34 (0.76)	3.62 (0.88)	3.51 (0.79)	3.38 (0.74)	1.20	
家庭内人間関係	3.59 (0.96)	3.52 (0.80)	3.56 (1.02)	3.67 (1.01)	3.51 (0.85)	0.49	
大切							
夫性格	4.22 (0.76)	4.20 (0.72)	3.92 (0.77)	4.36 (0.71)	4.07 (0.79)	2.93 *	4>3
夫仕事	4.21 (0.77)	4.13 (0.72)	3.97 (0.84)	4.18 (0.76)	3.99 (0.76)	2.00 +	
子供性格	4.29 (0.58)	4.20 (0.69)	4.18 (0.68)	4.39 (0.67)	4.19 (0.67)	1.42	
子供能力	4.00 (0.74)	3.88 (0.72)	4.00 (0.69)	4.06 (0.78)	3.95 (0.72)	0.63	
家庭内人間関係	4.52 (0.58)	4.52 (0.59)	4.51 (0.56)	4.63 (0.55)	4.36 (0.66)	2.89 *	4>5

注　評定値は「非常に～」が5、「全く～でない」が1.
＋ $p<.10$, ＊ $p<.05$.

自己効力感尺度としては，坂野・東條（1986）の20項目からなる一般性セルフ・エフィカシー尺度を使用した．「はい」「いいえ」の2件法である．この尺度は第4表のような3因子からなり各因子には4〜7項目が含まれる．最も因子負荷量の高い項目は，因子1,2,3の順に「どんなことでも積極的にこなすほうである」「何かをするとき，うまくゆかないのではないかと不安になることが多い」「友人よりも特に優れて知識を持っている分野がある」である．

手続き　調査Ⅰ，Ⅱと同様であるが，配布にあたっては封筒を添付し，回収の際は封をした上で返却してもらった．

結果と考察

回収した545人のデータのうち，夫のいない人と，1項目でも記入漏れのあったものを除き，489人のデータを分析に使用した．年齢，家族構成，学歴の顕著な影響はみられなかったので，以下の分析では無視する．仕事の有無については若干の影響はあったが，とりあえずはそれも無視して分析し，最後に仕事の有無の影響について結果をまとめる．

生涯学習実施状況と質問への回答傾向による主婦のタイプ分け　4種類の生涯学習活動実施状況による分類では，大学（院）のみ（3人，0.6%），市民講座のみ（24人，4.9%），カルチャースクールのみ（114人，23.3%），サークルのみ（64人，13.1%），市民講座とカルチャースクール（10人，2.0%），市民講座とサークル（15人，3.1%），カルチャースクールとサークル（56人，11.5%），市民講座とカルチャースクールとサークル（11人，2.2%），何も参加していない（192人，39.3%），の9群に分類される．しかし，このままでは群の数が多すぎて，1群の人数が少ないところが多い．そこで，いずれかの生涯学習活動を実施している8群のうち，3人しか実施者のいなかった大学・大学院をまず除き，3つの生涯学習活動をいずれか1つだけ実施している3つの群と，3つの全てを実施している群，あわせて4群を核とし，3つのうちの2つを実施している群の家庭・家族，自分，自己効力感についての回答パターンの似ているものを，4つの核群のいずれかと同一群にまとめることにより，表2の最上欄の5群にまとめ直した．

生涯学習実施状況と生涯学習認識度，要求度，必要度との関係　実施状況による群ごとに，生涯学習認識度，要求度，必要度に関する各4項目（計12項目）の評定値の平均値(*SD*)を算出したところ表2のようであった．各項目ごとに，群の効果を調べる*F*検定を実施した．その結果も表に示してある．認識度，要求度，必要度のいずれにおいても，実際に参加している生涯学習活動についての得点が高いことが分かる．何も実施していない群5の人は，市民講座，カルチャースクール，サークルに関するいずれの項目においても得点が低かった．しかし，大学（院）の認識度と必要度については，他群と大きな差はなかった．これらの結果から被調査者の回答が率直で妥当性のあるものであることが分かる．

生涯学習実施状況と家族についての認識度，満足度，重要度との関係　実施状況による群ごとに，家族についての認識度，満足度，重要度に関する各5項目（計15項目）の評定値（5〜1）の平均値(*SD*)を算出したところ，表3のようになった．各項目ごとの*F*検定の結果も表に示す．全体的にみると，カルチャースクールとサークルの両方あるいはそれに市民講座を加えた3つを実施して

いる群4の，家族についての認識度，満足度，重要度が圧倒的に高く，次にカルチャースクールあるいは市民講座とカルチャースクールを実施している群1がつづく．サークルのみの群2は，子どもについての認識度，満足度，重要度が低い傾向にあり，市民講座あるいは市民講座とサークルを実施している群3は，夫についての認識度や重要度が低い傾向がある．そして何も実施していない群5では，家族についての認識度，満足度，重要度のすべてで圧倒的に低い．これらの結果から，主婦が娯楽的要素の強い生涯学習活動を実施するにあたっては，家庭が安定していることや夫との関係が良好であること，または経済的な豊かさが影響を与えると考えられる．

生涯学習実施状況と自分についての認識度，満足度，重要度との関係　実施状況による群ごとに自分についての認識度，満足度，重要度を尋ねる項目の評定値を算出し，各項目ごとにF検定を実施した．その結果，サークルのみの群2，およびカルチャースクールとサークルの両方あるいはそれに市民講座を加えた3つを実施している群4の人が自分の性格が重要であると認識していた(群1から群5へ順に評定平均値は，4.07，4.16，3.95，4.13，3.88)．群の効果が有意なのはこの項目のみであったが，全体的にみれば，やはりカルチャースクールとサークルの両方あるいはそれに市民講座を加えた3つを実施している群4の，自分についての認識度，満足度，重要度が高く，何も実施していない群5がすべてにおいて低かった．このような結果は，友人関係を保ち，その関係に基づいた生涯学習活動が楽しいものであるためには，その人の性格が大きな要素になることを示唆している．

生涯学習実施状況と自己効力感との関係　群ごとに，各因子の得点，自己効力感全体の得点，およびF検定の結果を表4に示す．カルチャーとサークルの両方あるいはそれに市民講座を加えた3つを実施している群4が，何も実施していない群5よりすべてにおいて高得点であったが，統計的に有意なのは「行動の積極性」の因子においてのみであった．群4の主婦たちにはアクティブな人が多いのに対し，何も実施していない群5の主婦には，生涯学習活動が実施できないのではなく，しない人が多く含まれていると思われる．

表4　生涯学習実施状況にもとづく群別にみた自己効力感の各因子と全体の得点の平均値(SD)及び群間の差に関する検定結果

	群1 n=124 カル・市民カル	群2 n=64 サークル	群3 n=39 市民・市民サー	群4 n=67 カルサークル・3つ	群5 n=192 なし	F(4, 481)	多重比較
因子1 行動の積極性	0.54 (0.29)	0.52 (0.32)	0.52 (0.29)	0.61 (0.30)	0.47 (0.32)	2.82*	4>5
因子2 失敗に対する低不安	0.66 (0.29)	0.69 (0.31)	0.66 (0.31)	0.71 (0.30)	0.67 (0.31)	0.32	
因子3 能力の社会的位置づけ	0.55 (0.34)	0.51 (0.33)	0.58 (0.31)	0.60 (0.28)	0.50 (0.34)	1.55	
自己効力感全体	0.58 (0.22)	0.57 (0.25)	0.58 (0.22)	0.64 (0.24)	0.54 (0.26)	2.08	

注　得点範囲0～1．得点が高いほど，行動が積極的であり，失敗に対する不安が弱く，能力の社会的位置づけが出来ていることを示す．

仕事の有無の影響　各群の中で現在職についている人の割合を調べると，群1から群5まで順に48%，45%，59%，45%，66%であった．χ^2検定の結果，群間に有意な差が見られた($\chi^2(4, N=486)=17.91$)．ライアン法による下位検定を行ったところ，群5で現在職についている人の割合が，群4，群2，群1より有意に高かった．

次に，各質問項目の平均評定値に仕事の有無による違いがあるかどうか，群(5)×仕事の有無(2)による二要因分散分析を実施した．興味のあるのは，仕事の有無の主効果と群と仕事の有無の交互

作用のみであるが，それらが有意な項目はわずかに2つであった．1つはカルチャースクールへの要求度で，仕事の主効果が有意であった（$F(1,484)=3.93$）．すなわち仕事の無い人（3.12）は仕事の有る人（2.88）よりも評定値が高かった．カルチャースクールは，仕事をしておらずに余暇のある主婦が求めやすい生涯学習活動であるということが示唆される．もう1つの項目は，夫の仕事に対する満足度で，交互作用が有意であった（$F(3, 482) = 2.66$）．単純主効果の検定の結果，市民講座あるいは市民講座とサークルを実施している群3においてのみ，仕事の有る人（3.88）のほうが，仕事のない人（3.26）よりも有意に平均評定値が高かった．この群の仕事を持っていない人の平均評定値は，群5の人たちよりも低かった．市民講座は娯楽色の薄い，お金のかからないというイメージを持たれている生涯学習活動であるが，これに参加する無職の主婦は，市民講座そのものに価値を見出して参加するというよりも，夫の収入が高くて経済的な余裕があれば，別なもっとお金のかかる生涯学習活動を行いたいという不満を持っている人が多いのかもしれない．他の群では，仕事の有無による差は大きくなかった．仕事の有無と自己効力感との関係については，同様の2要因分散分析の結果，「行動の積極性」因子，「能力の社会的位置づけ」因子および自己効力感の全体得点において仕事の有無の主効果が有意であった（順に，$F(1,484) = 8.37$，6.66，7.43）．いずれにおいても，仕事が有る人のほうが，無い人よりも自己効力感が高かった．（行動の積極性：仕事有0.57，無0.48；能力の社会的位置付け：仕事有0.59，無0.50；全体：仕事有0.61，無0.54）

総合考察

本研究では，主婦が生涯学習活動を実施するにあたって，影響があると考えられる家庭内の要因や個人の要因について検討した．

まず調査Ⅰ，Ⅱで，4種類の代表的な生涯学習活動について主婦の持つイメージの特色を明らかにした．生涯学習活動の実施にあたり，生涯学習活動の種類によって主婦が考慮する点が異なると考えられたためである．実際に主婦が生涯学習活動実施に際して考慮する点をみてみると，新しい知識が得られるかどうか，充実感を感じられるかどうか，有益かどうか，楽しい活動であるかといった点が含まれており，やはり生涯学習活動を実施することへのイメージは，充実した生活を送ることと深く関係している．これは，1981年に中央教育審議会答申として出された，「生涯教育について」の中の，「人間がその生涯を通じて，自己自身を深めることによって価値在る生涯を送ることにこそ生涯学習の意義があり，このような学習を可能にすることが生涯教育の理想とするところである」との見解と一致している．ただし4種類の生涯学習活動別に見るとイメージは異なっており，とくに金銭面についてはカルチャースクールや大学（院）にお金がかかるというイメージがもたれている．また，サークル活動は知識や技能の獲得，有益性が比較的低いイメージがあり，娯楽的要素の強い活動であるとイメージされていることがうかがえる．

次に，調査Ⅲでは生涯学習活動に影響を与える要因について検討した．生涯学習実施状況に基づいて分類した4群の特徴を見ると，まず，自分がしたいと思っている生涯学習活動を実施していることが分かる．池田（1997）によれば，生涯学習とは，家庭，学校，公民館，カルチャーセンター，職場及びマスメディアなど，その実施の場所や方法に関わりなく，これら及びその他の可能な教育

資源を利用して行われる個人的及び集団的な学習活動の全てを含み，その共通の特徴は「意図的学習」を意味することである．本調査の結果も，生涯学習は本当に「やりたいことを，やりたいようにやっている」即ち，意図的学習であるということを支持しているといえよう．

次に，家庭や自分についての認識について述べる．何らかの生涯学習活動を実施している人（特に，多くの種類の生涯学習活動を実施している人）と，何もしていない人とでは，家庭や自分についての質問項目での得点にいくつか違いがみられた．まず自分については，生涯学習を実施している人のほうが，自分の性格を大切な要因であるとしている．そのような人は自己効力感も高く，特に行動の積極性得点で顕著にその傾向が表れている．また，家族との関係についても，生涯学習を実施している人の方が，家庭内の人間関係や子供の性格についてよく知っており，家庭内の人間関係を大切としている人が多い．自分のやりたいことをするためには，家族の協力も当然必要になる．家庭内が安定し，人間関係が良好であることによって，主婦も自分の求める生涯学習活動を実施することができるということであろう．さらに，夫との関係も重要である．生涯学習活動を実施している人のほうが，夫の仕事に満足している．主婦の生涯学習実施には，経済的な問題も考慮しなければならないことがうかがえる．中年期夫婦においては，妻の経済的地位が高いほど夫は妻に対して共感的なコミュニケーション態度をとる傾向があるとされているが（平山・柏木，2001），本調査の結果では，生涯学習活動を実施している人のほうが，夫の性格に満足している．すなわち，夫との関係が良好であるということ自体も，生涯学習活動の実施と関係しているのであろう．生涯学習を実施している人の中でも，積極的で自己効力感が高く，家族との関係に満足しているという傾向は，特にサークルとカルチャースクールの両方をする人で高くなっている．イメージ調査からも分かるように，いずれの活動も娯楽の要素が強く，楽しんで活動するという側面が高い．これらの活動の実施者には，環境的にも恵まれている人が多いということであろう．家族との関係，とりわけ夫との関係が良好であること，経済的な満足が得られていることが，お金はかかるが楽しみや充実感がある娯楽性の高い主婦の生涯学習活動実施の重要な要因であるように思われる．

逆に，何も生涯学習活動を実施していない人の特徴を見てみると，家庭内の要因についての得点などがすべて低い．この群の人たちは自己効力感も低いが，中でも仕事を持たず生涯学習も実施していない人の自己効力感が特に低いようである．この人たちは，あまり積極的に活動しようとしない人，換言すれば，自信もなく動けない人なのではないだろうか．こういった主婦が社会から孤立し，多くのストレスを抱え，その結果満足感の少ない生活を余儀なくされていることが本調査からも示唆された．人生を充実したものにするためには，生きがいを求めて活動することの重要性をこの結果は示していると思われる．

ところで，本調査の被調査者は首都圏の，比較的高学歴(大卒以上 54%)で，家庭もかなり恵まれた人たちであった．すなわち，学生生活を求め，社会復帰を真剣に考える被調査者ではなかった．そのために，「大学（院)」の実施者が少なく，あくまでも趣味的な生涯学習活動の実施者であり，社会生活をレベルアップさせるために生涯学習を実施しているのではなかったと考えられる．また，家族の協力，とりわけ夫の経済的協力を感じさせる結果は，必ずしも自立した主婦の姿ではなかった．したがって，今後の課題としては，社会復帰の可能性を配慮し，被調査者の年齢を低く設定す

ることやそれを必要とする環境にある人を対象にすることがあげられるであろう．また，本調査では実施者が少なく，分析対象からはずした「大学（院）」については，その他の生涯学習活動とはっきりと異なったイメージが示されており，人数をそろえて調査する必要があると思われる．

引用文献

赤松達也　2001　カウンセリングのあり方　産婦人科の実際　50，805-811.

Bolger, N., Delongis, A., Kessler, R. C. , & Wethington, E. 1990 The microstructure of daily rolerelated stress in married couples. In J. Eckenrode, & S. Gore (Eds.), *Stress between work and family.* New York: Plenum Press, pp.95-115.

柏木恵子・数井みゆき・大野祥子　1996　結婚・家族観の変動に関する研究(1)~(3).　日本発達心理学会第7回大会発表論文集，240—242.

平山順子・柏木恵子　2001　中年期夫婦のコミュニケーション態度：夫と妻は異なるのか？　発達心理学研究，12，216-227.

市川伸一　1998　認知カウンセリングから見た学習方法の相談と指導　ブレーン出版

池田秀男　1997　生涯教育と生涯学習　日本生涯教育学会（編）　生涯学習辞典　東京書籍　p.12-17.

坂野雄二・東條光彦　1986　一般性セルフ・エフィカシー尺度作成の試み　行動療法研究，12，73-82.

総理府　1999　生涯学習に関する世論調査　総理府（内閣総理大臣官房広報室）

生涯学習・社会教育行政研究会（編）　2002　生涯学習・社会教育行政必携（平成14年版）　第一法規出版